

# 農村集落の社会特性と定住に関する実証的分析

—兵庫県篠山市を事例として—

Study on Region Characteristic and settlement in Rural Area

-A case of Sasayama city, Hyogo Prefecture-

山口 創\* 中塚雅也\* 星野 敏\*\*

So YAMAGUCHI\* Masaya NAKATUKA\* Satoshi HOSHINO\*\*

(\*神戸大学大学院農学研究科 \*\*京都大学大学院農学研究科)

(\* Graduate School of Agriculture Kobe University \*\* Graduate School of Agriculture Kyoto University)

## I はじめに

現在、農山村地域において、急速な過疎・高齢化により、住民の定住をどのように促すかは重要課題の一つとなっている。住民の定住は、多様な要因から影響を受けると考えられるが、本研究では、そのなかでもコミュニティ活動の活性度、地域に対する住民の意識、そしてソーシャル・キャピタル<sup>注1)</sup>と呼ばれる住民間の信頼や繋がりをはじめとする社会的な特性に着目し、それらと住民定住の関係を明らかにすることを目的とする。これまで農村部の定住問題を扱った研究は立地条件や若年層の定住意向の視点からなど多岐に渡る<sup>注2)</sup>。また社会特性に着目した研究においても、集落の活性化要因やソーシャル・キャピタルを扱った研究など、多くの蓄積がみられる<sup>注3)</sup>。しかし定住と社会特性の関係に論点を置いた研究は少なく、両者の関係を明らかにすることは今後の定住対策を考える上で有益なことと考えられる。本研究では、まず地域の最小単位である集落ごとの社会特性を明らかにし、次にその特性と住民の定住傾向との関係を実証的に分析する。そして今後の定住促進の方策について考察する。

## II 調査地概要ならびに調査方法

### 1. 調査地の概要

本研究の調査地は、兵庫県篠山市である。篠山市は1999年に旧多紀郡篠山町、西紀町、丹南町、今田町の4町が合併して生まれた市である。人口46,865人(2005年国勢調査)、269集落より構成されており、主な産業は農業と観光業である。

篠山市は、地勢的には中山間地域に属しているが、市の

中心部では市街地が形成されており、またJR宝塚線や舞鶴自動車道を利用すれば、大阪または神戸まで1時間程度で移動可能で、通勤圏となっている。しかし、駅やインターチェンジの近くなどアクセス条件が良好なところでは、宅地開発が進み、新興住宅地を形成している地区

もあるが、アクセス条件の悪いところでは、インターや駅にたどり着くまでに1時間近く要する地区も存在する。以上のように篠山市は、市内での差異はあるが、全般的にみれば比較的都市圏に近く、地理条件が決定的な定住阻害要因とはなっていない。定住が多様な要因の影響を受けると考えられることから、本地域を事例対象地とした。

### 2. 研究の方法

篠山市の全269集落の自治会長を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査は、まず2006年11月下旬に開催された、篠山市の定例行事である自治会長研修会にて調査票を配布し、回答頂いた。欠席者に対しては、同年12月上旬に、郵送にて同様のアンケート調査を行った。回答率は76.6%(206/269)であった。調査項目は、集落の社会特性に関する項目と、集落の住民定住の状況に関する項目とを設定し、回答はすべて5段階で評価していただいた(5:非常に当てはまる, 4:やや当てはまる, 3:どちらでもない, 2:やや当てはまらない, 1:まったく当てはまらない)。

本稿では、まずアンケート調査より得られた集落の社会特性と住民定住との関係を分析した。そして対象地域において定住に大きな影響力を持つと考えられる社会基盤、地



図1 対象地域

理条件などの影響を一定以下にし、社会特性と定住との関係について再度分析を行い、両分析結果について考察した。さらに、関連性の高い社会特性を明らかにするため、若者定住やU・Iターンなど、定住のタイプ別に社会特性との相関関係を分析した。

### Ⅲ 篠山市の定住状況

#### 1. 定住の概念と定住指標

現在の人口流動が激しい社会において、定住を一律に定義することは難しい。一般的には、狭義にはいわゆる夜間人口を指すが、夜間人口に來訪人口、連携人口を加え定住人口と解釈している定義<sup>注4)</sup>もみられる。本研究では定住を狭義にとらえた上で、定住に関する動向を把握するために、夜間人口と同等の意味で用いる。また、定住状況を示す指標として、アンケート調査より得られた主観的な定住指標と統計データを用いて求めた30代人口率<sup>注5)</sup>の2つを用いる。

主観的な定住に関する指標としては、若者層の定住の程度、住民流入の程度、潜在的な住民流入の可能性の程度<sup>3</sup>の3つを設定し、それぞれ、①若い世代が定住しているか、②U・Iターンで戻る(と期待できる)人が多いか、③集落外に住む子や兄弟がよく帰省するか、という質問に対する順序尺度による回答を用いた。子や兄弟の帰省は、厳密には住民の定住を示しているとは言えないが、子や兄弟がよく帰省する集落ほどUターンもしくはIターン(Uターン者の配偶者・子を想定)が多いと考えられることから、この指標は住民流入の可能性を示しているにとらえる。

また、もう一つの定住指標として30代人口率を用いた理由は、一般に住民の流出契機は進学・就職であり、反対に流入は子供が小学校に進学する時期(30代)か定年後のU・Iターンで戻ってくる人が多いため、定住の進んでいる地域とそうでない地域、特に若年層の定住状況によって30代人口率に差が生じ、定住(特に若年層の定住)を説明する指標として妥当であると考えたからである。表1に各定住指標をまとめる。

表1 定住指標

	主観的定住指標	客観的定住指標
若年層の定住	若者が定住	30代人口率
住民の流入	U・Iターン	
住民流入の可能性	子や兄弟の帰省	

#### 2. 篠山市の人口動態

篠山市の人口は、戦後まもなく57,000人ほどであったが、昭和40年頃には43,000人と急激に人口が減少し、昭和60年頃までは更に減少し続け、約41,000人で底打ちする。その後、人口は増加に転じ、平成12年頃に約47,000人でピークに達し、現在に至るまで緩やかな減少

傾向にある。昭和45年頃までの人口減少は、高度経済成長期の労働力の流出と考えられ、その後の人口増加は、宅地開発による影響が大きいと考えられる。地区別の人口推移(図2)を見ても、新興住宅地を多く形成する、丹南、今田、篠山地区(篠山市中部及び西部)の人口増加が目立ち、反対に宅地開発が進んでいない多紀、城東地区(篠山市東部)では、昭和55年以降恒常的に減少傾向にあることが、これを裏付けている。

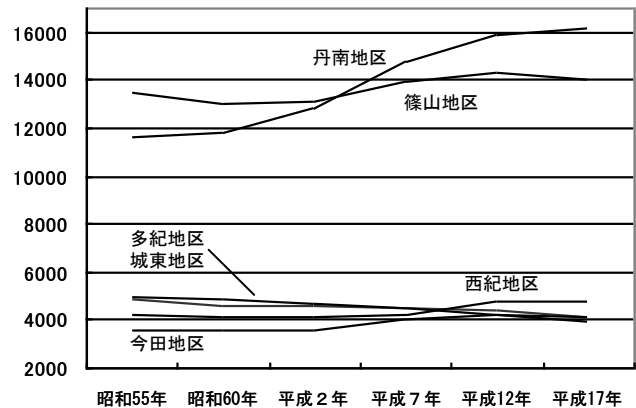


図2 地区別人口推移

#### 3. 30代人口率を用いた定住状況

図3は篠山市の30代人口率を集落単位に表したものであるが、市街地を形成している市の中心部では30代人口率が高い集落が集中している。またJR篠山口駅やインターチェンジがある市の西部においても高い値を示している集落が多くみられる。これらの地域は前述のように、宅地開発が進み、新興住宅地を形成している集落が多く存在しているため、30代人口率が高くなっていると考えられる。反対に市の東部では、30代人口率が低い地域と高い地域が比較的混在しているのがわかる。これらの地域はあまり宅地開発が進んでおらず、宅地開発によって30代人口率が高くなっているとは考えにくく、その他の要因の違い、おそらく集落の社会特性の違いによって住民定住に差が生じていると思われる。

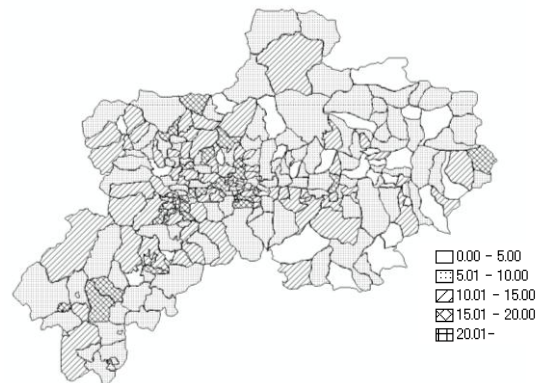


図3 集落ごとの30代人口率

表2 調査内容とアンケート項目

調査内容		アンケート項目
ソーシャル・キャピタル	信頼	・住民同士の連帯感・信頼は強い ・住民は自治会を頼りにしている
	規範	・住民は集落行事に協力的である ・住民はお互い助け合う雰囲気がある
	ネットワーク	・住民間の交流は活発だ ・他の集落や都市部など外部との交流は活発だ
住民活動の状況	青年活動	・消防団など青年世代の活動が充実している
	子供活動	・子供の参加する集落活動が充実している
	コミュニティ活動	・スポーツ・趣味のコミュニティ活動は熱心だ
	祭り	・集落の祭りには熱心だ
住民と集落の情緒的な繋がり	愛着・誇り	・多くの住民は集落への愛着を持っている
	魅力	・多くの住民は自分の集落を魅力がないと感じている
	団結心	・周りの集落に比べてまとまりがあると感じている
開放性	外部開放性	・外部の人を受け入れる雰囲気がある
	内部開放性	・集落のしきたりや慣習からは比較的自由である ・新住民も集落行事は同じように担うべきと考えられている
集落の財政状況		・うちの集落は比較的、経済的に貧しい方だ

#### IV 集落の社会特性と定住との関係

##### 1. 社会特性に関する調査項目

アンケート調査項目のうち、集落の社会特性に関する調査項目は、住民の定住と関係があると仮説的に考えたソーシャル・キャピタルの構成要素（住民間の信頼・規範・ネットワーク）、住民活動の状況、住民と集落の情緒的な繋がり、集落の開放性、集落の財政状況の5種類、合計17項目を設定した<sup>注6)</sup>。

これらの社会特性は集落の財政状況を除き、相互に影響を及ぼすものと考えられ、また集落の財政状況もその収入の多寡によって社会特性に及ぼす影響は変化するものと考えられる。表2にこれらのアンケート項目を記載する。

##### 2. 社会特性の分類と集落の類型化

集落の社会特性を分類するために、因子分析を行った。因子分析には表2に示した17項目の質問項目を用い、因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用い、因子間に相関があることを仮定した斜交回転（プロマックス回転）を行った。ただし各項目のうち、因子負荷量が0.35以下

表3 社会特性の因子分析結果  
(プロマックス回転後の因子パターン)

	因子1	因子2	因子3
住民交流	0.482	0.212	0.182
青年活動	0.025	<b>0.592</b>	-0.023
祭り	0.314	<b>0.503</b>	-0.135
子供活動	-0.231	<b>0.914</b>	-0.005
コミュニティ活動	0.090	<b>0.632</b>	-0.015
外部との交流	0.139	0.459	0.043
連帯感・信頼	<b>0.965</b>	-0.152	-0.138
自治会を頼りにしている	<b>0.703</b>	0.076	0.035
集落行事に協力的	<b>0.820</b>	0.050	-0.015
助け合いの雰囲気	<b>0.802</b>	-0.023	0.080
愛着・誇り	<b>0.748</b>	0.061	-0.047
まとまりがある	<b>0.734</b>	-0.036	0.094
外部を受け入れる雰囲気	0.052	0.159	<b>0.557</b>
慣習が自由	-0.038	-0.134	<b>0.786</b>

(注) 因子負荷量0.500以上を太字で表記した

の3項目を削除し再度行った。

表3に因子パターン、表4に因子相関行列を示す。

第1因子は「連帯感・信頼」(0.965)、「助け合いの雰囲気」(0.802)など、ソーシャル・キャピタルの中心概念として知られる「信頼」、「規範」の負荷量が高くなっている。その他に住民と集落の情緒的繋がりを表す「愛着・誇り」(0.748)「まとまりがある」(0.734)の項目も高くなっている。そこで、この因子

は「信頼・まとまり」に関する因子と解釈する。またこの因子は、社会特性のなかでも住民の心的な豊かさを表しているとも考えられる。第2因子は「子供活動」(0.914)「コミュニティ活動」(0.632)「青年活動」(0.592)と住民活動への充実や熱意に関する項目の負荷量が高く、「住民活動への活性」に関する因子と解釈する。第3因子は「慣習が自由」(0.786)「外部を受け入れる雰囲気」(0.557)と集落の開放性に関する項目の負荷量が高く、「開放性」に関する因子と解釈する。以上、因子分析から社会特性を「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」の3因子に集約した。

また、これら3因子間の関係を明らかにするため、3因子の因子得点を用いて、偏相関分析をおこなったところ、「住民活動への活性」と「信頼・まとまり」(偏相関係数; 0.550)、「住民活動への活性」と「開放性」(偏相関係数; 0.477)はそれぞれ相関関係にあることがわかった。また「信頼・まとまり」と「開放性」(偏相関係数; 0.113)には明確な関連性が見られなかった。

次に、この3因子についての因子得点を用いてクラスター分析(距離計算: ウォード法)を行い、集落の類型化を行った。その結果、「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」がともに高い類型から、ともに低い類型まで3段階の類型に分けられた(表5参照)。便宜上、3因子の水準がもっとも高い類型を類型1、中間的な類型を類型2、もっとも低い水準の類型を類型3とする。各類型に含まれる集落数を見ると、3因子ともに中間的な性質を持つ類型2が121集落と対象集落の6割近くを占めており、類型1と類型2が約2割ずつ占めている。

表4 因子相関行列

因子	1	2	3
1			
2		0.621	
3		0.542	0.408

表5 各類型の因子得点

		類型1 (n=38)	類型2 (n=121)	類型3 (n=44)
因子	信頼・まとまり	0.9789	0.1860	-1.3569
	住民活動への活性	1.1002	0.0551	-1.1018
	開放性	0.9272	-0.0131	-0.7647

(注) 数値は平均値

### 3. 社会特性と主観的定住指標との関係

これらの類型別に、定住との関係を分析した(表6参照)。まず、各類型との主観的定住状況との関係を分析する。主観的定住状況を表す、「若者が定住している」「U・Iターンが多い」「子や兄弟がよく帰省する」の3指標とも、類型1でもっとも高い値を示し、ついで類型2、類型3の順で高くなっている。すなわち、「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」の水準が高い集落(類型1)ほど、住民に定住状況が良好であると判断されていることがわかる。この分析では、アクセス条件の差などを考慮していないにも関わらず、社会特性と主観的定住指標の間に正の関係が見られる結果になった。このことから、調査対象地のような都市圏と近接した地域においては、定住に対する社会特性の規定性が比較的強いと考えられる。

また、3因子の得点が最も高い類型1では「若者が定住」「子や兄弟の帰省」がそれぞれ3.34、3.55と3.0以上で、一定の評価がされているが、「U・Iターン」についての評価は2.89となり、「若者定住」「子や兄弟の帰省」に比べて、評価が低くなっている。3因子が平均的な類型2においては、「若者が定住」「子や兄弟の帰省」がそれぞれ2.91、3.05、「U・Iターン」では2.55となり、定住状況は芳しくない判断されている。そして3因子の得点がかもっとも低い類型3では、「若者が定住」「子や兄弟の帰省」「U・Iターンが多い」がそれぞれ2.48、2.23、1.68、定住状況はかなり悪いと判断されている。また、同一類型における定住状況の評価の差から、社会特性に関するこれら3因子は定住のなかでも特に、若者定住、子や兄弟の帰省と比較的強い関係があり、それとは逆に、U・Iターンとの関係性はその他の2つの定住と比較して弱いと推察される。

### 4. 社会特性と30代人口率との関係

次に客観的定住指標である30代人口率との関係を分析する。主観的な定住指標とは逆に、社会特性の因子得点が高い類型ほど30代人口率が低くなっている。これは先に述べたように、宅地開発など社会特性以外の影響が大きいためだと考えられる。前述の主観的定住状況の分析と今回の分析において結果に違いが見られるのは、主観的定住状況はアンケートによる5段階評価であるのに対し、30代人口率は地域によって数%~30%と両指標の数値の振れ幅に大きな差があるためだと考えられる。

また、社会特性の因子得点が低い類型ほど30代人口率

が高くなっているのは、住民同士の結びつきが弱く、地域に対する愛着などが低いと考えられる新興住宅地を含んでいる集落が、3因子がともに低い類型ほど多く分類されているためではないかと推察される。

### 5. 一定条件下での分析

対象地域において、定住に大きな影響力を持つと考えられるアクセス条件などの影響を一定以下にし、社会特性と定住との関係を再度分析する。対象地域において定住に強い影響力をもつ要因として、宅地開発に加えて、アクセス条件や集落の市街化の程度などが考えられ、これら要因の影響を以下の方法でコントロールした上で、分析を進める。

これまで分析に用いた206集落のうち、①住宅開発が行われていない、②都市部までのアクセスが悪い、③市街地を形成していないという条件を全て満たす集落を選定した。まず②都市部までのアクセスが悪いでは、農業センサス「高速道路インターチェンジまでの時間」を用いて選定を行い、そのうち30分以上時間を要する地域を選定対象とした。対象地域からの都市部への移動は、高速道路か鉄道を利用する方法の2種類に限定されるが、インターチェンジと鉄道の駅は近距離に位置し、どちらに移動するにしても移動時間に大差はないため、アクセス条件を規定する指標は「高速道路インターチェンジまでの時間」だけで十分であると判断した。

ただし、上述のような機械的な選定では部分的に実情とそぐわないことも考えられる。そこで、地域的な事情に詳しい篠山市職員の方に選定集落の追加・削除をお願いした。その結果、上記3条件の影響が一定以下の集落として、61集落が選定された。

この61集落を用いて分析を進める。分析の方法として、先に分類した類型ごとに選定集落を抜き出し、各類型と定住指標との関係を分析する(表7参照)。

主観的定住指標との分析では「若者定住」「子や兄弟の帰省」では「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」の水準が高い類型ほど、定住状況は良好であると判断されていることがわかる。「U・Iターン」では3因子の水準が高い類型1、平均的な類型2においてもそれぞれ

表6 各類型と定住との関係

		類型1 (n=38)	類型2 (n=121)	類型3 (n=44)
定住指標	若者が定住	3.34	2.91	2.48
	U・Iターン	2.89	2.55	1.68
	子や兄弟の帰省	3.55	3.05	2.23
	30代人口率(%)	9.18	9.23	10.72

(注) 数値は平均値

表7 一定条件下における類型と定住との関係

		類型1 (n=12)	類型2 (n=42)	類型3 (n=7)
定住指標	若者が定住	3.17	2.86	1.30
	U・Iターン	2.33	2.46	1.50
	子や兄弟の帰省	3.25	3.17	2.50
	30代人口率(%)	9.53	6.89	6.28

(注) 数値は平均値

表8 定住指標と因子構成項目の相関係数

		若者定住	U・Iターン	子や兄弟の帰省
信頼・まとまり	連帯感・信頼感	<b>0.313*</b>	0.246	<b>0.431**</b>
	自治会を頼りにする	<b>0.300*</b>	0.134	<b>0.347**</b>
	集落行事に協力的	0.280*	0.110	0.284*
	助け合いの雰囲気	0.253	0.196	0.206
	愛着・誇り	0.183	0.153	0.296*
	まとまりがある	0.247	0.187	0.216
活動への活性	青年活動	0.236	0.074	0.136
	子供活動	<b>0.354**</b>	<b>0.310*</b>	0.177
	祭り	0.227	0.126	0.136
	コミュニティ活動	<b>0.345*</b>	0.259*	0.206
開放性	外部を受け入れる雰囲気	<b>0.311*</b>	<b>0.330*</b>	0.233
	慣習が自由	0.153	-0.025	0.153

\*…有意確率5%未満 \*\*…有意確率1%未満  
(注) 相関係数0.300以上に太字で表記した

2.33, 2.46 の評価であり、「若者定住」「子や兄弟の帰省」と比べ、両者の関係は希薄であると考えられる。また全集落を対象にした分析と比べ、類型2と類型3の間では部分的ではあるが評価の差がより明白になった。そして全体的に評価が低いのは、アクセス条件が悪い、宅地開発がないなどの定住に不利な条件にある集落を選定し、分析を行ったためだと考えられる。

次に30代人口率との分析を行った。その結果、3因子の水準が高い類型ほど30代人口率が高く、実際に若年層の定住状況は良好であることがわかった。また類型2と類型3では30代人口率にあまり差がないのに対し、類型1と類型2及び類型3との間には、比較的大きな差がある(t検定, 5%有意水準)。このことより、これら3因子は、ある一定水準以上になって初めて住民定住との関連性が高まるような性質を有するのではないかと推察される。

## V 定住に関係する具体的活動

これまでの分析から集落の「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」が住民定住と関連性があることがわかった。次に、定住に関する指標ごとに、関連性のある社会特性を明らかにするため、それぞれ「若年層の定住」「住民の流入」「住民流入の可能性」を想定した主観的な定住指標である「若い世代が定住している」「U・Iターンが比較的多い」「肉親がよく帰省している」の3指標と、各因子を構成している質問項目との相関関係を分析した。表8はその相関係数である。

### 1. 若者層の定住

若者定住には、他の項目と比べ「住民活動への活性」を構成する項目である「子供活動」(相関係数: 0.354)、コミュニティ活動(0.345)や「信頼・まとまり」を構成する項目であり信頼を表す「連帯感・信頼感」(0.313)と「自治会を頼りにする」(0.300)、また「開放性」を表す「外部を受け入れる雰囲気」(0.311)の項目との相関がみ

られた。これらのことから、若者定住には、住民同士の信頼感や、集落外の人を受け入れる開放性が重要であると思われ、特に子供に関する活動や、コミュニティ活動などの住民活動の活性が必要ではないかと考えられる。また、子供活動との相関がみられることから、若者の定住は、子供の生活環境の良し悪しと関係があるのではないかと推察される。

### 2. 住民の流入 (U・Iターン)

U・Iターンには、他の項目と比べ「住民活動への活性」を構成する「子供活動」(0.310)、「開放性」を構成する項目である「外部を受け入れる雰囲気」(0.330)の項目との相関がみられ、U・Iターンには、他地域から集落に移り住む時の受け込みやすさ、受け入れやすさが重要であると考えられる。また若者定住と同様に、子供活動との相関がみられるのは、U・Iターンで集落に移り住む年齢層は主として30代の若者が多く、そのため若年層の定住と同様に、子供の生育環境の良し悪しと関連があると考えられる。

3. 住民流入の可能性 (子や兄弟の帰省)

肉親の帰省では、他の項目と比べ「連帯感・信頼感」(0.431)、「自治会を頼りにしている」(0.347)と住民同士の信頼を表す項目との相関がみられた。また、他の2つの定住に比べると、「愛着・誇り」との相関がみられ、反対に、「開放性」を表す「外部を受け入れる雰囲気」との相関が低くなっているのがわかる。集落に親なり兄弟の家があり、以前は集落内に生活していた元住民は、集落に外部に対する開放性がなくても、疎外感を味わったりすることが少ないためだと考えられる。また、住民が地域に対して愛着や誇りを持っている集落では、現在は他地域に住んでいたとしても、自分の故郷といえるその集落に対して、住民と同じように愛着をもち続けているため帰省につながり、愛着・誇りとの関係が見られたのではないかと推察される。そしてその他に考えられる理由として、愛着や誇りを強く持っている住民が、他地域に住む肉親に対して、帰省を促しているのではないかと考えられる。

### 3. 住民流入の可能性 (子や兄弟の帰省)

肉親の帰省では、他の項目と比べ「連帯感・信頼感」(0.431)、「自治会を頼りにしている」(0.347)と住民同士の信頼を表す項目との相関がみられた。また、他の2つの定住に比べると、「愛着・誇り」との相関がみられ、反対に、「開放性」を表す「外部を受け入れる雰囲気」との相関が低くなっているのがわかる。集落に親なり兄弟の家があり、以前は集落内に生活していた元住民は、集落に外部に対する開放性がなくても、疎外感を味わったりすることが少ないためだと考えられる。また、住民が地域に対して愛着や誇りを持っている集落では、現在は他地域に住んでいたとしても、自分の故郷といえるその集落に対して、住民と同じように愛着をもち続けているため帰省につながり、愛着・誇りとの関係が見られたのではないかと推察される。そしてその他に考えられる理由として、愛着や誇りを強く持っている住民が、他地域に住む肉親に対して、帰省を促しているのではないかと考えられる。

## VI おわりに

集落の社会特性と住民定住との関係を分析したところ、まず社会特性は「信頼・まとまり」「住民活動への活性」「開放性」の3因子に集約され、主観的判断による定住状況と正の関係が見られた。そして対象地域において定住への影響が強いと考えられるアクセス条件などの影響を一定以下にし、改めて分析を行ったところ、これら3因子と

客観的定住指標である30代人口率との間にも正の関係が確認された。また、これらは、ある一定以上の水準に達して関係が強まるような性格を持つのではないかと推察された。さらに定住のタイプによって、関連性の強い社会特性も明らかになった。すなわち、若年層の定住や子や兄弟の帰省と比較的強い関係にあり、U・Iターンは前者と比べて関係が弱かった。そして、定住のタイプごとにどのような社会特性と関係が見られるか分析したところ、若者定住には、住民同士の信頼感や集落の開放性、そして子供の活動やコミュニティ活動に対する住民の活性、U・Iターンについては、子供活動に対する活性と外部を受け入れる開放性、子や兄弟の帰省は、住民同士の信頼感、地域に対する愛着と比較的関係がみられた。

また、以上のように関係が示された集落の社会特性と住民定住の間には、一方向の関係にあるのではなく、どちらか一方が高まればもう一方も高まるといったような双方向の関係にある。そこで今後の定住促進のためには、社会特性と住民の定住が相乗的に高めあうような正の循環をつくるのが重要であると考えられる。この循環を動かしていくため、本研究で住民定住との関係が示された社会特性の増大が重要であるといえる。また、因子間の偏相関分析から、「住民活動への活性」は、「信頼・まとまり」、「開放性」の両方と相関関係にあることから、特に地域における住民活動の活性化が重要であると言える。

今後の課題として社会特性のパフォーマンスが高い地域とそうでない地域の事例的研究を行い、具体的にどのような自治・活動が社会特性のパフォーマンスに好影響または悪影響を与え、それらが住民の定住意向にどのような影響を与えているのかを明らかにする必要がある。

#### 【注釈】

- 注1) ソーシャル・キャピタルとは、1)によると「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、信頼・規範・ネットワークといった社会組織の特徴」と定義されている。
- 注2) 例えば、立地条件や農業条件などとの関係を見た 藍澤ら<sup>4)</sup>、若年層の定住意向と環境評価との関係を見た 青木ら<sup>5)</sup>、交流事業との関係を見た 齊尾ら<sup>6)</sup>がある。

注3) 例えば、地域特性と住民意識の關係に着目した藤居<sup>7)</sup>、集落の活性化要因についての劉ら<sup>8)</sup>、ソーシャル・キャピタルと高齢者の健康との關係を分析した市田ら<sup>10)</sup>がある。

注4) 蟹江義弘・藤本尚久他(1993):『平成4年度 広域農林地総合開発整備調査』,pp.96.

注5) 人口に対する30~39歳人口の占める割合。

注6) 住民活動など、集落の財政状況を除く16項目いずれもSC把握の指標に含めることも可能であるが、本研究ではSCの中心概念である信頼・規範・ネットワークのみをSCと分ける。

#### 【参考文献】

- 1) ロバート・パットナム、河田潤一訳(2001):『哲学する民主主義-伝統と改革の市民構造-』.NTT出版,東京.
- 2) 内閣府国民生活局市民活動促進課:『ソーシャル・キャピタル-豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて,内閣府NPOホームページ, <<http://www.npo-homepage.go.jp/data/report9.html>>,2003年6月19日,2007年5月4日.
- 3) 宮川公男・大森 隆編(2004):『ソーシャル・キャピタル-現代経済社会のガバナンスの基礎-』.東洋経済新報社,東京.
- 4) 藍澤 宏・有泉龍之(1995):過疎地域における集落人口変容からみた集落類型に関する研究,農村計画学会誌,14(3),18-29.
- 5) 青木秀幸・鎌田元弘・宮澤鉄蔵(1999):中山間地域における高校生の生きがい指標と定住意向からみた生活環境評価,日本建築学会計画系論文集,第524号,177-184.
- 6) 齊尾直子・長尾樹偉・藍澤 宏(2001):農村地域における住民の「集落外への外向き姿勢」と「都市住民との交流効果」との連関-集落活性化と住民の定住意識向上につながる交流効果を視点として-,農村計画論文集,第3集,31-36.
- 7) 藤居良夫(2000):中山間集落における地域特性と住民意識との関連に関する考察,農村計画論文集,第2集,265-270.
- 8) 劉 鶴烈(2003):山間集落における活性化要因に関する考察-住民の意識と行動の視点から-,農村計画論文集,第5集,181-186.
- 9) 劉 鶴烈・千賀 裕太郎(2004):山間地域における住民活力の評価に関する考察,農村計画論文集,第6集,193-198.
- 10) 市田行信・吉川郷主・平井 寛・近藤克則・小林慎太郎(2005):マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャル・キャピタルに関する研究-知多半島28区に居住する高齢者9,248人のデータから-,農村計画論文集,第5集,277-282.

#### Summary

The depopulation is one of the biggest problems in the rural areas. In this study, we made a questionnaire survey on Region Characteristics to the representatives of rural communities in Sasayama city, Hyogo prefecture. We also calculated the population ratios of the thirties in each community that we regard as an important index of settlement. Then, we classified rural communities of Sasayama city into 3 using their own Region Characteristics. After that, we analyzed the relationship between each type and the population ratios of the thirties and other indexes of settlement. As the results, we found the settlement must be promoted by Region Characteristics.

(2007年5月18日 受付)

(2007年11月17日 受理)